

# 上山手廃寺発掘調査概報

## (2)

1980年

広島県教育委員会

## 正 誤 表

頁 捲 目次	行	誤	正
第4圖		(1 : 80)	(1 : 100)
2	10	長さ13.35m高	長さ13.35m, 高
3	6	22cm, の柱穴は	22cmの柱穴は
3	8	広がらず	拡がらず
3	23	大土拡	大土塁
4	14	東西幅2.7~44m	東西幅2.7~4.4m
4	20	未調査の土拡2	未調査の土塁2
4	28	徐去後	除去後
7	左7	土拡	土塁
8	9	190 度	90度
8	11	薄い堆積状態	薄い堆積状態
8	12	瓦群の堆積は	瓦群の堆積
8	21	柱穴・土拡の存在	柱穴・土塁の存在
9		(1 : 80)	(1 : 100)
11	8	荒いもの	粗いもの
12	注 3	異なる	異なる
18	18	磨滅している	摩滅している
20	6	広い面積を有する	広い面を有する
20	9	明かとなった。	明らかとなった。
21	注 (1)	京都府西隆寺跡	奈良県西隆寺跡

## 目 次

Iはじめに.....	(1)
II調査の概要.....	(2)
1.既往の調査.....	(2)
2.調査の経過.....	(2)
発掘調査日誌抄.....	(6)
III検出の遺構.....	(8)
建物基壇Ⅱ.....	(8)
IV出土遺物.....	(10)
1.瓦類.....	(10)
2.土器類.....	(16)
3.石製品類.....	(18)
4.鉄製品類.....	(18)
Vまとめ.....	(19)

## 挿図目次

第1図 寺跡周辺地形図及びトレンチ配置図(1:400).....	(折込)
第2図 1・4・6・7・8トレンチ平面図及び断面図(1:80).....	(折込)
第3図 5トレンチ瓦・礫群実測図(1:40).....	(5)
第4図 建物基壇Ⅱ実測図(1:80).....	(9)
第5図 軒丸瓦実測図及び拓影(1:4).....	(11)
第6図 丸瓦・平瓦拓影(1:6).....	(13)
第7図 平瓦実測図及び拓影(1:6).....	(14)
第8図 隅木蓋瓦実測図及び拓影(1:4).....	(15)
第9図 有孔円形の瓦実測図及び拓影(1:3).....	(15)
第10図 土器及び石製品実測図(1:3).....	(17)
第11図 スタンプ形石製品実測図(1:3).....	(18)

## 図版目次

- 図版1 a 上山手廐寺跡全景(東より)  
b 同 上 (南より)
- 図版2 a 建物基壇Ⅱ周辺瓦群堆積状態(東より)  
b 建物基壇Ⅱ(東より)
- 図版3 a 建物基壇Ⅱ(北東より)  
b 1 トレンチ柱穴群(北西より)
- 図版4 a 1 トレンチ鶴尾出土状態  
b 同 上 有孔円形の瓦出土状態
- 図版5 a 4 トレンチ柱穴群(南より)  
b 5 トレンチ瓦・礫群出土状態(西より)
- 図版6 a 6 トレンチ柱穴群(南より)  
b 7 トレンチ溝状遺構・柱穴(北より)
- 図版7 軒丸瓦
- 図版8 平瓦
- 図版9 平瓦・丸瓦・隅木蓋瓦
- 図版10 有孔円形瓦・鶴尾・土器・スタンプ形石製品・鉄釘

## 例　　言

1. 本概報は、昭和54年度の国庫補助金を得て広島県教育委員会が行った広島県三次市向江田町字無量地に所在する上山手廐寺の第2次発掘調査概報である。
2. 本書の執筆・編集は桑原隆博が行った。
3. 遺構・遺物の整理・復元・実測・トレースは桑原のほか向田裕始があたり、出土遺物の写真は中田昭・新谷武夫が撮影した。
4. 本概報に使用した方位はすべて磁北である。
5. 本年度新たに建物基壇を検出したため昨年度検出した建物基壇をⅠとし、本年度検出の建物基壇をⅡとする。

## I はじめに

上山手廃寺の発掘調査は、本寺跡を含む三次市向江田町の一帯が県営圃場整備事業地域内に含まれ、昭和51年度から事業がすすめられているため、これに対応して遺跡の内容と範囲確認のために昭和53年度から広島県教育委員会が実施しているものであり、本年度は第2回目の調査である。

もともと本寺跡は「古瓦出土地」として報告されていたが、遺跡の性格は不明であった。しかし、「日本盡異記」にみられる旧三谷郡三谷寺に比定される寺町廃寺に近いことと、同寺出土瓦と同様の瓦が出土することから、その重要性が注目されていた。そして昭和53年度の第1次発掘調査で瓦および磚を立てた建物基壇の一部と膨大な瓦が出土したことから寺跡の存在が確認された。そのため、本年度の第2次調査は昨年度検出した建物基壇Ⅰの規模・性格と他の建物遺構との関連を含めた御藍配置・寺域の確認を目的として調査をすすめることにした。調査は文化庁の補助金を得て、本年度は計250万円（国庫補助金125万円、県費負担金125万円）で昭和54年10月から12月にかけて、広島県教育委員会文化課職員が実施した。

なお、発掘調査をすすめるにあたって広島県文化財保護審議会委員松崎寿和、村上正名、潮見浩の先生方から助言をいただくとともに、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、松下正司所長の協力を得た。また、三次市教育委員会、三次農林事務所、土地所有者の永岡次三郎・中村吉一の両氏をはじめ地元関係者各位から多大な御協力をいただいた。さらに、本稿をまとめるにあたって遺構・遺物の一部について奈良国立文化財研究所の森都夫・田辺征夫の両氏から御教示をいただいた。末筆ながら厚く御礼申しあげる次第である。

## II 調査の概要

### 1. 既往の調査

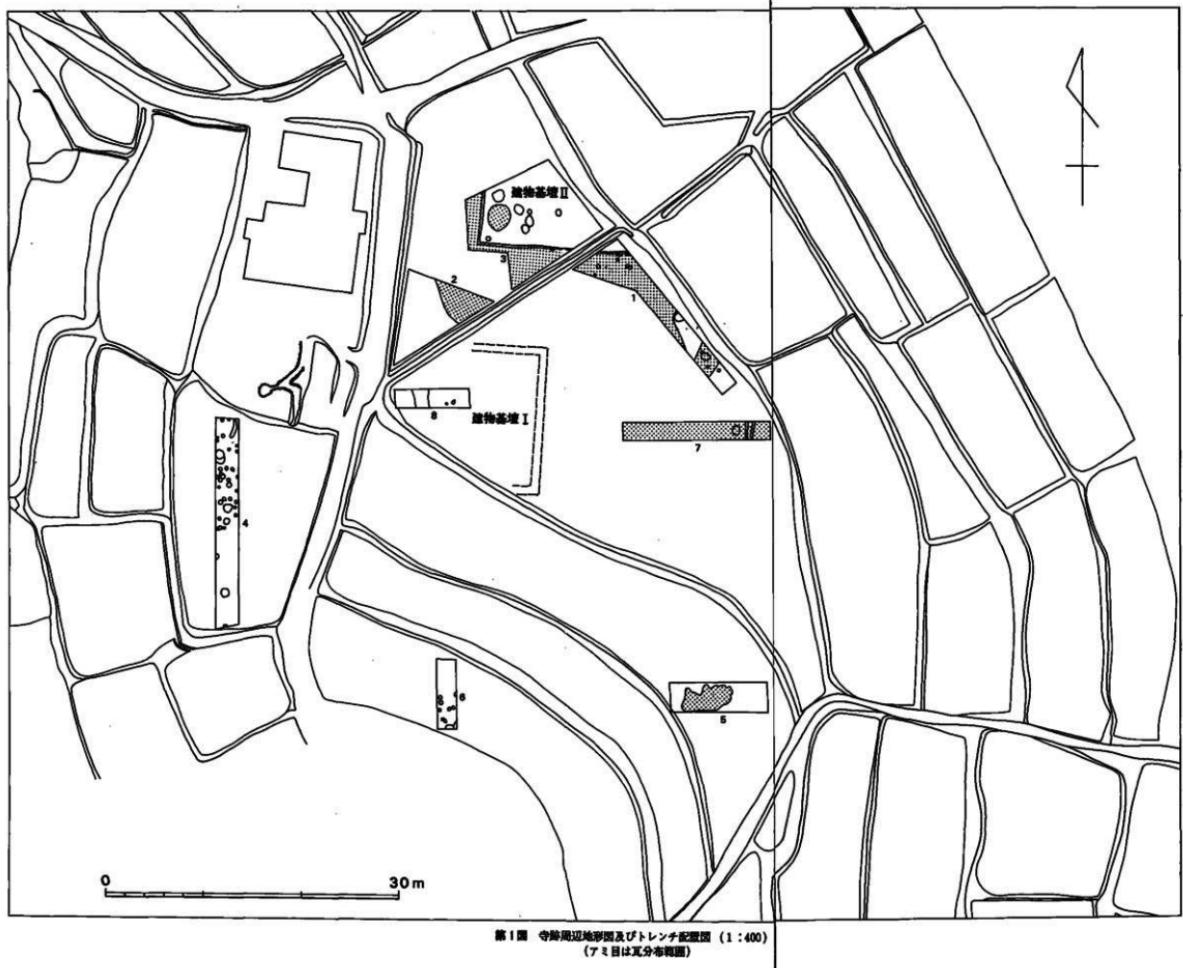
上山手廬寺跡は昭和52年水田周囲の溝等から複弁蓮華文軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鶴尾・<sup>(1)</sup>埴破片の收拾が、報告されていたが、現地は階段状の水田がひろがる浅い谷地形となっており、遺跡の性格・範囲等は全く不明であった。

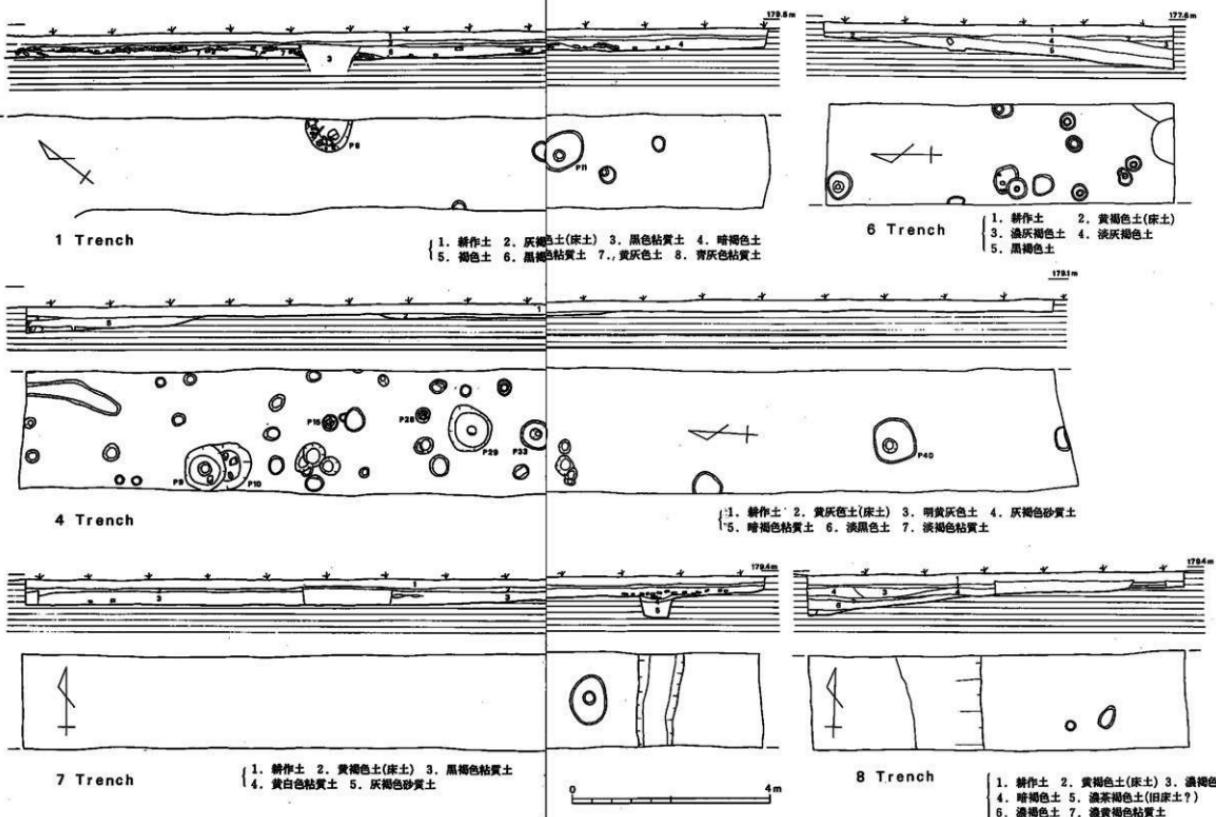
昭和53年度の第1次調査は古瓦の出土している地点を中心にして13ヶ所にトレンチを設定し調査が実施された。その結果、2・3・13トレンチで建物基壇Ⅰを検出した。基壇は東辺全面と北辺および南辺の一部を検出した。基壇の側面外装は北辺は平瓦を貼り付けた状態に立て、東・南辺は正方形の堀を立て、さらにその周りに犬走り状に石列を伴い二重(二成)基壇を成していた。規模は東辺(南北)で内側の長さ13.35m高さ0.3m、外側の長さ14.93m、高さ0.15mであった。石列の周間に雨落ち溝を確認できなかったことから、石列外面が溝の内壁の機能を果したとも考えられる。しかし、基壇の東西規模は確認できず、南側の一段低い水田に設定した6トレンチで、基壇周囲に崩落した瓦群と推定される一部を確認したが、基壇そのものがすでに削平され消滅していた。また、基壇上面においてもすでに過去の削平により礎石・抜き取り穴・根石は検出できなかった。基壇周囲には軒丸瓦・丸瓦・平瓦が厚く堆積し、その間から須恵器・鉄釘が出土した。軒丸瓦は瓦当面下端を削り三角形の突起をつくり出した備後北部地域に分布の中心をもつ所謂「水切瓦」と呼称されているもので、複弁八葉蓮華文軒丸瓦の一類のみである。

また1・8トレンチからも瓦が出土しているが、遺構を検出することはできなかった。時期的には異なるが1トレンチから13~14世紀の南方系のものと推定される三彩土器片が出土している。

### 2. 調査の経過(第1・2図)

本年度の調査は昨年度検出した建物基壇Ⅰの東西規模の確認・御藍配置・寺域を明らかにすることを目的として、1~8トレンチを設定し、調査を行った。トレンチは昨年度調査の補足のためもあり重複する部分もあった。トレンチは耕作・地形上設定困難な箇所を除いて東西又は南北の方向を基本として設けた。





第2圖 1・4・6・7・8トレンチ平面図及び断面図(1:80)

昨年度の1トレンチで瓦群を検出し建物の存在が推定されるため昨年度の1トレンチ北東に平行して設定した。その結果、トレンチ北西端で東西方向に延びる建物基壇Ⅱと、大小14のピットを検出した。基壇縁辺の径25~30cm、深さ5cm前後のピットは黒色粘質土が埋没しており後世のものと推定される。また、周囲の径30~40cm、柱径15cm、深さ10cmのピット群、南東端の径30cmの小ピット、径80cm、柱径22cm、深さ22cm、の柱穴は瓦群除去後の検出であり、寺と同時期又はそれ以前のものであろう。しかし、調査区が限られたため性格は不明である。瓦群は基壇端から南東方向に広がっているがトレンチ端までは広がらず、また末端で一度途切れるが、P9により切られたためであろう。P9は径92cm、埋没土は黒色粘質土である。瓦は黒褐色土中に含まれており、昨年度の調査、及び本年度他のトレンチでも同層からの出土である。軒丸軒・丸瓦・平瓦・鶴尾・用途不明の有孔円形の瓦・土器類・鉄釘が出土している。

## 2 トレンチ

昨年度検出した建物基壇Ⅰの東西規模を確認するために設定した。東側では瓦群を検出したが、西側は攪乱されており、基壇の東西規模を確認することはできなかった。東側では径40cmのピットと径105cmで礫・瓦混入の土括を検出した。円形土括の礫・瓦の一部を除去すると、桶状の棺が現われたため近世墓と推定されたが、湧水が激しく、埋め戻した。軒丸瓦・平瓦・県内初見の隅木蓋瓦が出土している。

## 3 トレンチ

1トレンチで検出した建物基壇Ⅱの東西辺延長線上に設定したが、耕作の関係上調査区が限定された。建物基壇Ⅱの南西コーナーを検出したのみでその規模を明らかにすることはできなかった。また、径60~80cm、柱穴20cm前後、深さ10cm位の柱穴群は中世のものと推定される。径100~110cm、深さ30cm位の礫・瓦混入の2基の土塙は後世のものと考えられるが性格不明である。礫・瓦混入の大土括は220×250cmであり、出土遺物から近世のものと推定される。

## 4 トレンチ

西側地域の遺構確認のために設定した。溝状遺構1、ピット41を検出した。溝は現長195cm、幅25~44cm、深さ17~20cmの規模であり、埋没土は黒褐色土である。ピットは隅丸方形プランを呈し大形の柱穴が5、円形プランを呈し小形のピットが36ある。大形の柱穴はP9とP10が重複しており二時期を推定することができる。P9、P10、

P29の柱穴セクションでは柱周囲の埋め土は礫混りの黄褐色土を中心とした土である。柱穴の規模を掘り方、柱径、深さの順に記すとP9は79×90cm・26cm・77cm、P10は93cm・?・69cm、P29は85×93cm・20cm・52cm、P33は58×55cm・22cm・29cm、P40は83×88cm・28cm・40cmである。建物の構造は明らかにすることはできなかったが柱穴の規模から寺に關係するもの、あるいはほぼ同期のものと考えられる。小ピットは径が20~40cm、深さは30~10cm未溝のものまで様々である。埋没土は黒褐色土のものと暗褐色土のものがあり数時期あると思われる。P15は底面に平瓦3枚を敷き、P28では礫5個が存在した。P31からはスタンプ形石製品が上層より出土している。小ピットはトレンチ北半分に集中しているが性格は不明である。

#### 5 トレンチ（第3図）

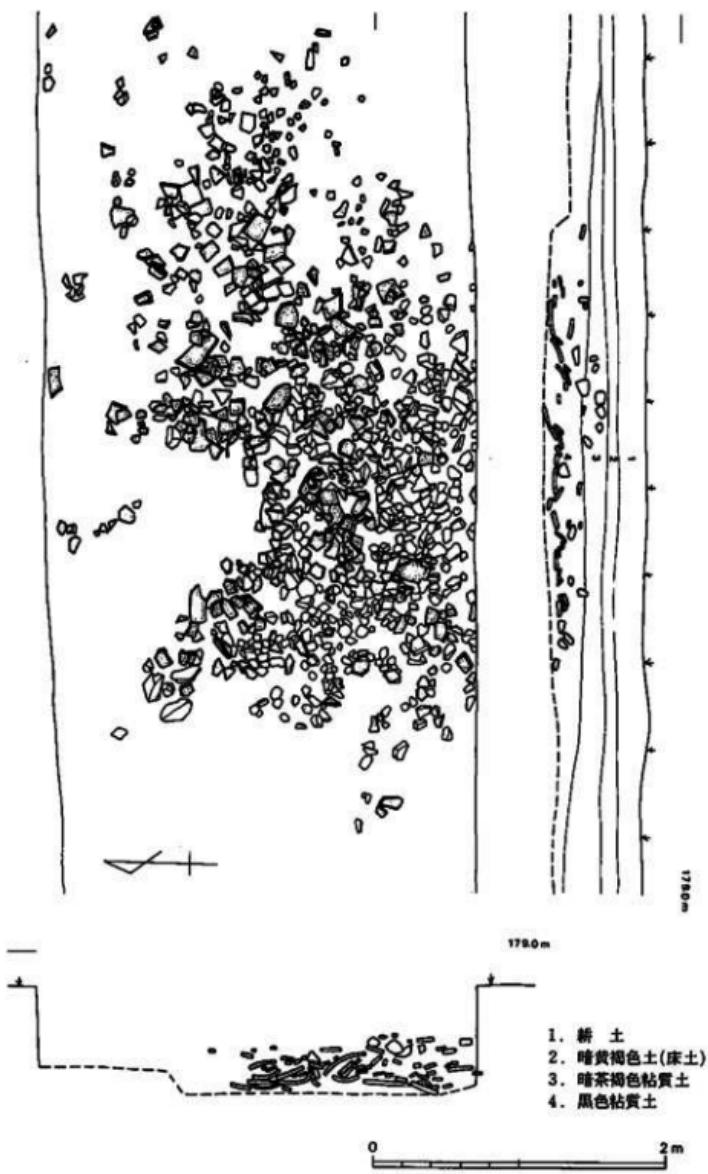
昨年度の8トレンチ南東端で瓦が出土しており、寺城東側の造構確認のために東西方向に設定した。黒褐色粘質土中より瓦・礫群の堆積を検出したが、これらはトレンチの南に延びておりその範囲・性格を明らかにすることはできなかった。瓦・礫群は西半に礫が多く、その範囲は東西幅2.7~44m、南北端(現)2.4m、厚さ約40cmである。しかし、底は地山とならず黒褐色粘質土が続いている。地形的にこの付近には小さな谷が入っているものと推定される。瓦は大きな破片もあり、風化はしていない。軒丸瓦片が瓦・礫群内で2点、トレンチ東端で瓦当面完形品が1点出土している。

#### 6 トレンチ

寺城南端の確認のために建物基壇Iの中軸（推定）延長線上（南北方向）に設定した。柱穴と推定されるピット11、未調査の土括2を検出した。ピットは円形・隅丸方形プランを呈し、一辺(径)が50cmのものもあるが、35cm前後のものが多く、深さ10~20cmの規模であり、小形のピットが多い。埋没土は黒褐色土でほとんど差はないが、重複しているものや近接したものなどがあり2時期以上が考えられる。建物の構造は明らかではないが、柱穴の規模から中世のものと推定される。

#### 7 トレンチ

御藍中枢部の確認のために建物基壇Iの中軸延長線（東西方向）に設定した。トレンチ全体に瓦が散在的に出土したが、建物の存在を推定することはできなかった。瓦除去後、トレンチ東端で溝1、柱穴1を検出した。溝は南北方向で、上幅66~91cm、底幅49~53cm、深さ40cmを測り、断面逆台形を呈する。埋没土は砂質土である。



第8図 5トレンチ瓦・砾群実測図(1:40)

柱穴は橢円形プランを呈し、 $71 \times 97\text{cm}$ 、柱径 $25\text{cm}$ 、深さ $33\text{cm}$ である。溝・柱穴は瓦除去後の検出であり、セクションからみても寺に伴うもの、又は同時期のものであろうが、性格は不明である。

## 8 トレンチ

建物基壇 I の東西規模を確認するため東西方向に設定した。しかし、耕作・開田による削平で消失しており確認できなかった。

(注)

- (1) 上重武和「旧三谷郡内の古瓦出土地」『広島県文化財ニュース』第74号 1977年
- (2) 広島県教育委員会「上山手廻寺発掘調査概報」(1) 1977年 第1次調査の報告に於いては建物基壇 I について瓦・埴列を基壇本来として扱い石列の部分は犬走りとし、二成基壇の可能性もあるとした。本来二成基壇と言われるものは石あるいは埴等を二段以上積み、ある程度の高さを有しその内側にさらに基壇を築いている。建物基壇 I の場合は一段の石でありわずか $0.15\text{cm}$ の高さしかなく、むしろたれ流しの雨落溝の片側的な様相を呈している。しかし、飛鳥寺の例などでは、外側の基壇は低いが二成基壇として扱っており、このことから本廻寺例も二成基壇としてよいのではなかろうか。

## 発掘調査日誌抄

1979年（昭和54年）

10月29日（月）晴

発掘調査器材を現地に搬入し、調査の準備を開始する。地権者等にあいさつ。

10月30日（火）晴

1 Tを設定し排土作業を開始する。床土下の黒色土中より瓦が出土する。  
地形測量を開始する。

10月31日（水）晴

1 Tの北端に東西方向の基壇を検出する。瓦群の清掃を開始する。

11月1日（木）晴

1 T-拡張区を設定し排土作業を開始する。  
2 Tを設定し排土作業を開始する。

11月2日（金）晴

1 T-清掃を行い写真撮影を行う。  
2 T-排土作業、瓦群の検出作業を行う。

11月5日（月）曇のち雨

2 T-瓦群の精査を行う。

3 Tを設定し排土作業を開始する。

11月6日（火）曇時々晴

3 T-排土作業を行う。

4・5 Tを設定し排土作業を開始する。

11月7日（水）晴

2・3 T-瓦群の清掃を行う。

4 T-精査、写真撮影を行う。ピット群の調査を行う。

11月8日（木）晴

1・3 T-瓦群・基壇の写真撮影を行う。

4 T-ピット群の調査を行う。

5 T-排土作業を行う。砾・瓦群を検出する。

11月9日（金）晴

2 T-瓦群の取り上げ作業を行う。溝状造構を検出する。

11月13日（火）小雨

3 T-拡張区-排土作業を行う。

6 T-排土作業を行う。ピットを検出する。

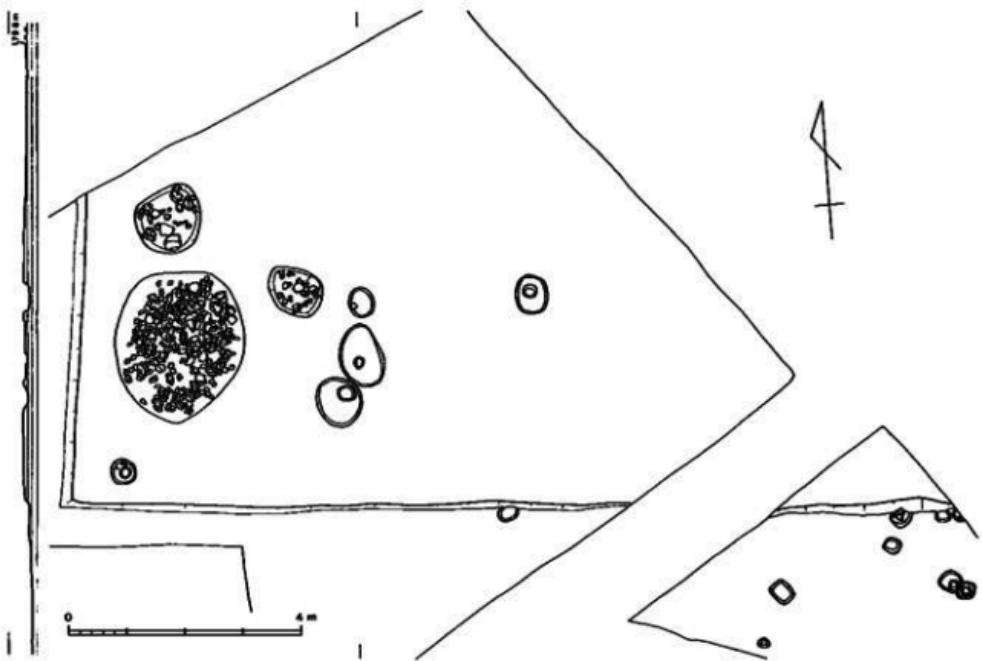
11月14日（水）曇時々晴

- 2 T—溝状透構の調査を行う。  
3 T拡張区—排土作業を行う。基壇・瓦群を検出する。  
5 T—瓦・礫群の精査を行う。  
6 T—ピット群の調査を開始する。
- 11月15日（木）晴  
3 T—基壇内に瓦・礫混入の土壌を検出する。  
6 T—セクション・平板実測を行う。
- 11月16日（金）晴のち曇  
2 T—造り方を組み実測を行う。  
6 T—清掃後、写真撮影を行う。造り方を組み実測を行う。  
7 Tを設定し排土作業を行う。瓦出土する。
- 11月19日（月）晴  
1・3 T—瓦群の取り上げ作業を行う。  
4 T—造り方を組み実測を行う。
- 11月21日（水）晴のち曇  
3 T—さらに西に拡張区を設定し排土作業を行う。基壇南西コーナーを検出する。
- 11月26日（月）曇時々小雨  
2 T—断ち割りを行う。基壇立ち上りは検出できず。  
4・6 T—埋め戻し作業を開始する。
- 11月27日（火）曇時々晴  
5・7 T—写真撮影を行う。
- 11月29日（木）曇一時雨  
2 T—ピットの調査を行う。瓦・礫を混入。  
7 T—セクション実測を行う。瓦の除去作業を行う。  
5 T—実測を行う。  
8 Tを設定し排土作業を行う。
- 11月30日（金）晴  
7 T—溝・ピットを検出する。
- 12月1日（土）曇時々雨  
現地説明会を行なう。
- 12月3日（月）晴  
3 T—基壇上の精査を行いピットを検出する。  
7・8 Tの実測を行う。  
埋め戻し作業を行う。
- 12月4日（火）曇のち小雨  
1 T—ピットを検出する。造り方を組み実測を行う。
- 12月6日（木）晴  
1・3 T—写真撮影を行う。造り方を組む。
- 12月7日（金）晴  
3 T—実測を行う。  
2 T—ピットの実測を行う。
- 12月10日（月）晴  
基本杭を設定する。  
埋め戻し作業を完了する。  
器材を整理し帰広する。

### III 検出の遺構

#### 建物基壇 II (第4図)

1トレンチ及び3トレンチに於いて建物基壇を1基検出した。1トレンチに於いては北西端でほぼ東西方向に延びる基壇縁辺部を検出した。しかし、耕作によりかなり削平されており、耕作土直下にわずかの床土がありすぐ基壇上面の黄褐色土となる。基壇の高さは14~18cm位しか残存していない。3トレンチに於いては1トレンチから西に延びる基壇南辺を検出し、トレンチ西端付近で基壇南西コーナーを検出し、それより北に向って延びる基壇西辺を検出することができた。しかし、基壇の南辺と西辺は190度になっていない。これは西辺付近が耕作により著しく削平され耕作土下が黄褐色土の基壇上面という状況で、基壇の高さも8cm位しかなく、瓦群も小片がほとんどであり、瓦群自体非常に薄い堆積状態であった。つまり基壇縁辺部の検出が非常に困難であったことによるものである。南辺に於いては西辺ほどでなく瓦群の堆積は比較的厚く基壇縁辺は明確であった。しかし、耕作土直下が基壇上面となることは同様であり、高さは8~17cmしか残存していない。現在確認している基壇の長さは南西コーナーを基点として南辺は上端で15.16m、下端で15.4m、西辺は上端で5.32m、下端で5.28mである。基壇の外壁は確認することができなかったが、基底部は地山を削り出し基壇を構築している。埠・縁石等の抜き取り痕を認めることができず、埠片も全く出土していないが、西辺周囲の瓦群中に人頭大の長方体の石が数個見られ、これらが縁石として使用されていた可能性も考えられないわけではない。なお階段・回廊等は検出することはできなかった。また、基壇上面に於いて礎石抜き取り痕・根石も検出することはできなかった。中・近世と推定される柱穴・土括の存在からみて早くから削平が行なわれた結果、基壇基底部のみ残存しているものであろう。基壇周辺の瓦群のほとんどは丸瓦・平瓦であったが、1トレンチ基壇縁辺付近より鶴尾の破片が数点、有孔の円形瓦が1点出土している。鶴尾は胎土から2個体存在したことは確実である。また建物基壇Iとの位置関係は、基壇I北辺と本基壇南辺との間隔は約10mであり、本基壇南西隅は基壇Iの北東隅から約7.2m西側の位置にあたる。



第4図 造物基壇II 実測図(1:80)

## IV 出土遺物

出土遺物はほとんど瓦類であるが、土器類、石製品、鉄釘もわずかではあるが出土している。ここでは整理の関係上瓦については特徴のあるものの記述にとどめた。

### 1. 瓦類

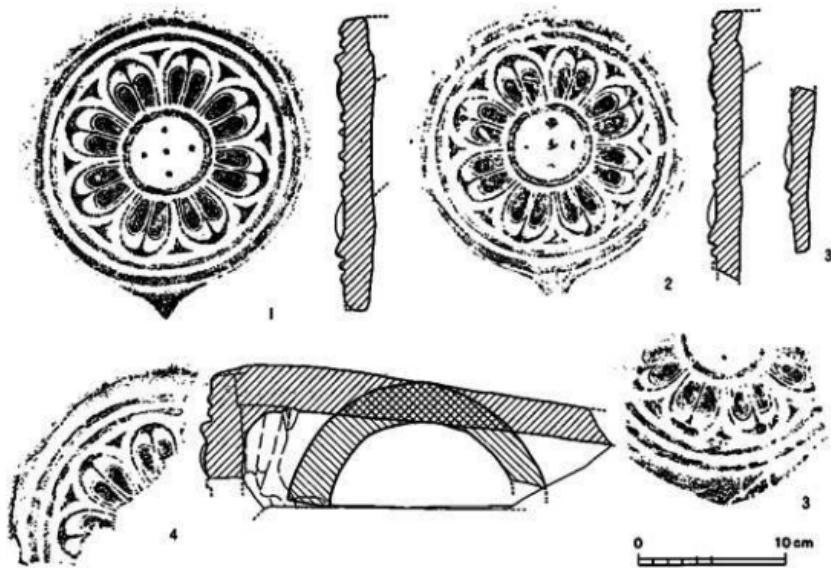
#### 軒丸瓦（第5図）

出土数は破片を含めて26点である。出土した軒丸瓦は複弁八葉蓮華文の一類のみである。所謂「水切り瓦」と呼称されているものであり、瓦当面下端に三角形の突起を有するものである。中房は圓線に囲まれ1+4の蓮子を配している。蓮子はほとんど十字状に位置している。蓮弁は弁端が丸く盛り上り反転しその中に大形の子葉を入れ、その各子葉を囲んで細隆起線がめぐり中房圓線に接続している。間弁は中房圓線まで達せず蓮弁とほぼ同高で盛り上っている。周縁には圓線が二重にめぐり、断面台形を呈し蓮弁より低い。水切りは筒瓦接合部下端よりヘラで削り作り出しているが、圓線に沿って削り、突起は内反りの三角形を呈すもの(1・2)、圓線から幅をもたせて削り、突起は外反りの三角形を呈すもの(3)の2形態が見られる。また圓線外縁が幅広く平坦面を有するもの(4)もある。瓦当裏面の調整は指頭によるおさえとナデによる。瓦当と筒瓦の接合は瓦当裏面にわずかに段が見られ内外面から粘土の補強を行って接合している。また瓦当裏面の縁辺に木口状工具で三角形状の刻み目を入れ粘土付着をよくしようとしている。

表1 軒丸瓦計測値及び観察表

(単位 cm)

番号	直徑	内区			外区		水切長	圓線外 縁の幅	焼 成 色	成 土 調	裏 面 整	筒瓦との 接合状態	備考
		中房径	弁区径	弁幅	幅	高							
1	18.0	5.8	14.4	4.0	1.6	0.3	2.0	0.1 ~0.2	やや 軟質 褐色	指ナデ 指押え	縁辺に木口工具 により刻み目。 若干の凹み。粘 土補強	3と同范か。 水切りは内反 り三角形	
2	17.2	5.7	13.7	4.0	1.5	0.3		0.1 ~0.2	良 好 灰 色	指ナデ 指押え	縁辺に木口工具 による刻み目。 若干の凹み。粘 土補強	電型の傷が著 しい。	
3				4.1	1.5	0.3	2.3		やや 軟質 褐色	指ナデ 指押え		1と同范か。 水切りは外反 り三角形	
4				4.0	1.5	0.3		1.2 ~1.5	良 好 青 灰色	指ナデ 指押え	若干の凹み。内 外面から粘土補 強。		



第5図 出土軒丸瓦実測図及び撮影(1:4)

#### 丸瓦（第6図）

玉縁のものではなく行基葺のものばかりである。凸面は叩き目・調整から3種類に分かれる。1) 格子目叩きの上に幅広い刷毛目調整を行ったもの、2) 幅広い刷毛目調整を行ったもの、3) 板状工具で搔いているものである。凹面は布目である。

#### 平瓦（第6・7図）

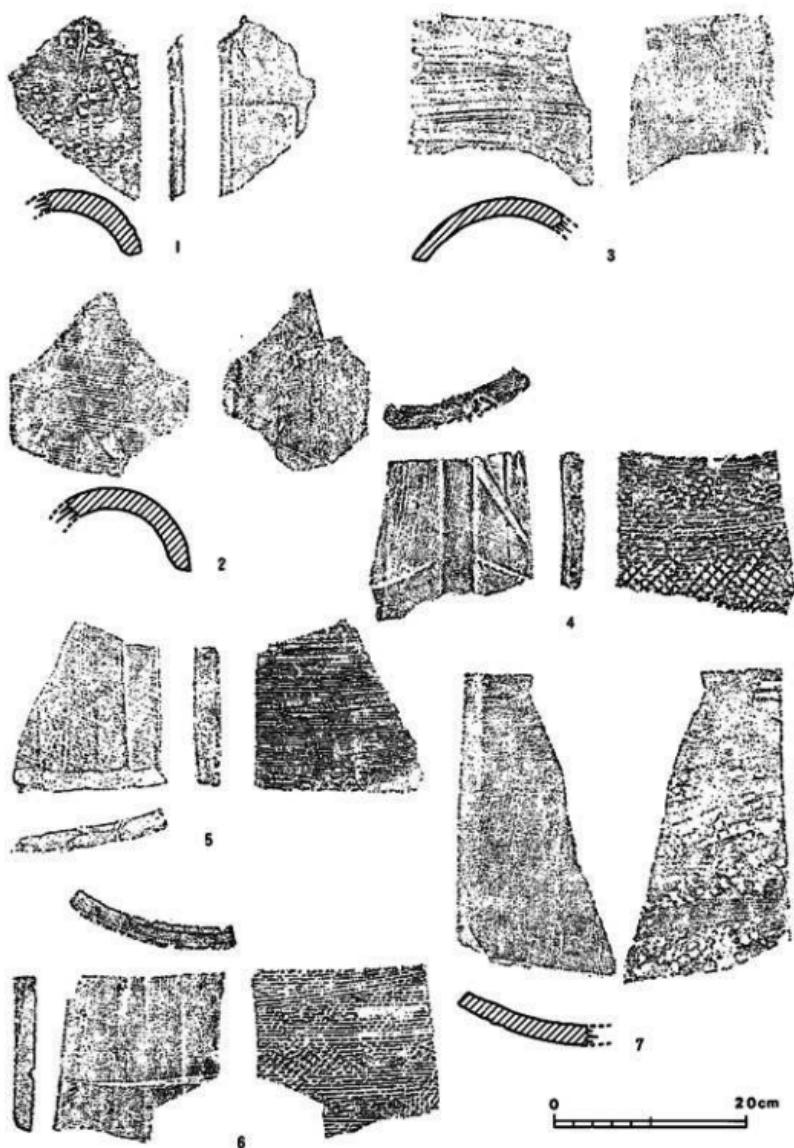
凸面は格子目の叩きの上に刷毛目調整を行ったもの、繩目の叩き、格子目の叩きの3種類がみられる。刷毛目調整の場合、施行する範囲、刷毛目の幅によりさらに細分することができる。凹面は全て布目であるが、細かいものと荒いものとがある。同一瓦で両者を難いで用いているものもある。全て桶巻作りによるものであり、側面には分割截線、切り残し痕が見られる。凹面には幅3cm前後の模骨痕が認められ、完形の瓦で8枚の板痕が見られることから桶は板が32枚前後でつくられていたのではなかろうか。

表2 丸瓦・平瓦観察表

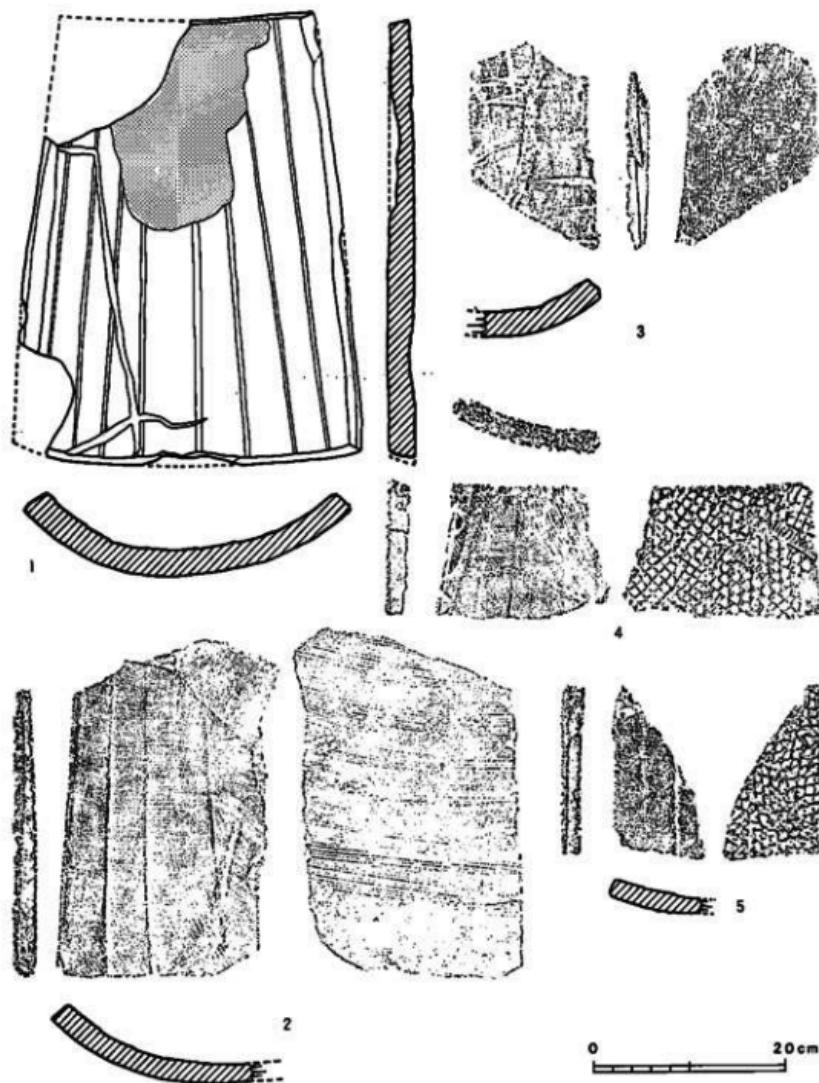
番号	凸面	凹面	側面	狭端面 広端面	鉄給色 成土色	備考
6   1 1	格子目叩きの上に幅広い刷毛目調整(5本/1cm)	布目(10本・11本) 側端ヘラ削りによる縁取り	切り目、切り残し痕あり		良好 堅鐵 暗青灰色	
6   2	幅広い刷毛目調整(単位6本/1.7cm)	布目(8本・8本) 側端ヘラによる縁取り			不良 やや軟質 淡黄褐色	
6   3	幅4cm位の4段U字状の板状工具で搔いている	布目(9本・8本)	切り目、切り残し痕あり		良好 堅鐵 暗灰褐色	
6   4	格子目叩きの上に部分的に幅広い刷毛目調整(単位7本/2.4cm)	布目(8本・10本) 布の離目・縫あり 横骨痕(3cm)	切り目、切り残し痕あり	狭端面ヘラ削り	良好 堅鐵 灰色	桶巻づくり
6   5	格子目叩きの上に刷毛目調整(単位7本/2cm)	布目(10本・11本) 横骨痕(3cm) 側端ヘラによる縁取り	切り目、切り残し痕あり	狭端面ヘラ削り	良好 堅鐵 灰色(一部 黒灰色)	桶巻づくり
6   6	格子目叩きの上に刷毛目調整(単位9本/3cm)	布目(8本・11本) 横骨痕(2.7cm)	切り目、切り残し痕あり	狭端面ヘラ削り	良好 堅鐵 灰色	桶巻づくり
6   7	格子目叩きの上に幅かい刷毛目と幅広い刷毛目調整(8本/1cm・5本/1cm)	布目(6本・7本) 横骨痕(2.7cm)	切り目、切り残し痕あり	狭端面ヘラ削り	軟 軟質 淡褐色	桶巻づくり
7   1	格子目叩きの上に幅広い刷毛目調整(5本/2cm)	布目 横骨痕(3.1cm)	切り目、切り残し痕あり	ヘラ削り(?)	良好 堅鐵 灰色	推定で長さ46.3cm、広端幅36cm、狭端幅26cm 桶巻づくり 摩滅が著しい
7   2	格子目叩きの上に幅広い刷毛目調整(単位8本/2.8cm)	布目(7本・8本) 横骨痕(上部3.4cm 下端4.2cm)	凸・凹両面側からヘラ削り	広端面ヘラ削り	良好 堅鐵 灰色	桶巻づくり
7   3	純目叩き	布目、2種の布使用(15本・12本と8本・8本) 横骨痕(2.5cm)	切り目、切り残し痕あり		良好 堅鐵 灰色	桶巻づくり
7   4	格子目叩き	布目(9本・10本) 横骨痕(2.9cm)	切り目、切り残し痕あり		良好 堅鐵 灰色	桶巻づくり
7   5	格子目叩き	布目(8本・9本) 横骨痕(3cm)	ヘラ削り、凸面側より縁取り		良好 堅鐵 灰褐色	桶巻づくり

## (注)

- 凸面の刷毛目で単位と記していないものは工具の単位が不明なものである。
- 凹面の布目は前者は経糸、後者は横糸であり1cm幅内での本数である。しかし、伸縮により部分的に異なっている。
- 横骨痕は幅であり、狭端部、広端部で異なる。



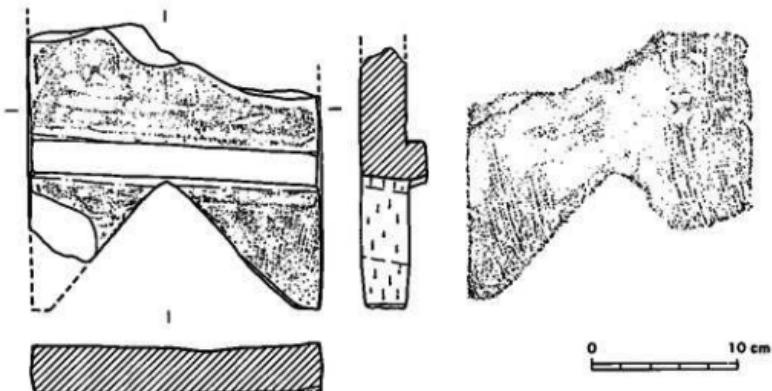
第6圖 九瓦·平瓦拓影(1:6)



第7図 平瓦実測図及び拓影(1:6)

### 隅木蓋瓦（第8図）

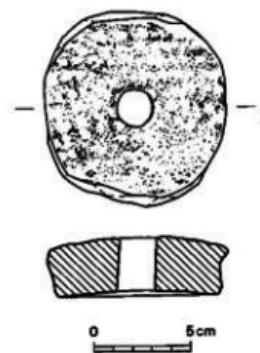
断面台形の凸帯をもち三角形の切り込みを一端にいたした長方形の板状のものである。幅は19.8cm、厚さは約3.5cmで、凸帯は下幅2.8cm、上幅2.3cm、厚さは1.5cmである。長さは欠失しており不明である。表面は一部に縄目の叩きが残っているが、全体にヘラナデ、ナデにより調整されている。裏面は粘土痕からの切り離しのままで糸切り痕が見られる。側面・三角形の切り込みにはヘラ削り痕がみられ、両側から数回に分けて行っている。色調は灰白色をし、焼成は良好であり、胎土は砂粒を含み堅緻である。



第8図 隅木蓋瓦実測図及び拓影(1:4)

### 有孔円形の瓦（第9図）

平瓦を転用したものであろうか、焼成後打ち割って円形を形づくり、断面はわずかに弧状を呈している。径は9.3~10cm、厚さ2.8cmである。孔は焼成前の穿孔であり径2.0cmである。表面は格子目の叩きを行っている。裏面は摩滅しており不明である。色調はやや赤色をおびた褐色をし、焼成はあまく、胎土は砂粒を含み軟質である。用途は不明であるが、孔は釘穴であろうか。



第9図 有孔円形の瓦実測図及び拓影(1:3)

## 鶴尾

鶴尾の破片と推定できるものが5点出土している。胎土・焼成から2個体の存在が推定できる。一つは、色調は外面黒色、内面暗茶褐色、胎土は砂粒を含み軟質、焼成はあまいものであり、背部にあたるもの、二つは、色調淡褐色、胎土は砂粒を含み堅緻、焼成良好であり、鋒・縫手部、凸縁部にあたるものである。

## 2. 土器類(第10図)

寺に關係すると考えられるもの、それ以降のものが出土しているが量的には少なく破片がほとんどである。

### 土師器

壺(1) 把手部分のみである。粘土塊を指ナデ成形して牛角状の把手をつくり出している。体部との接合は粘土補強により、その上を荒い刷毛目で調整している。色調は淡黄褐色、胎土は砂粒を含みやや軟質、焼成は良好とはいえない。

### 須恵器

壺蓋 (2)は扁平な宝珠形つまみのつくものである。内外面共にヨコナデ調整である。色調は暗灰色、胎土は堅緻、焼成は良好である。(3)は端部が垂直に折れたものである。内外面共にヨコナデ調整である。口径は15.2cm、色調は灰色、胎土は堅緻、焼成は良好である。(4)は端部に丸味をもち屈曲しているものである。内外面共にヨコナデ調整である。口径は16.8cm、色調は灰色、胎土は堅緻、焼成は良好である。

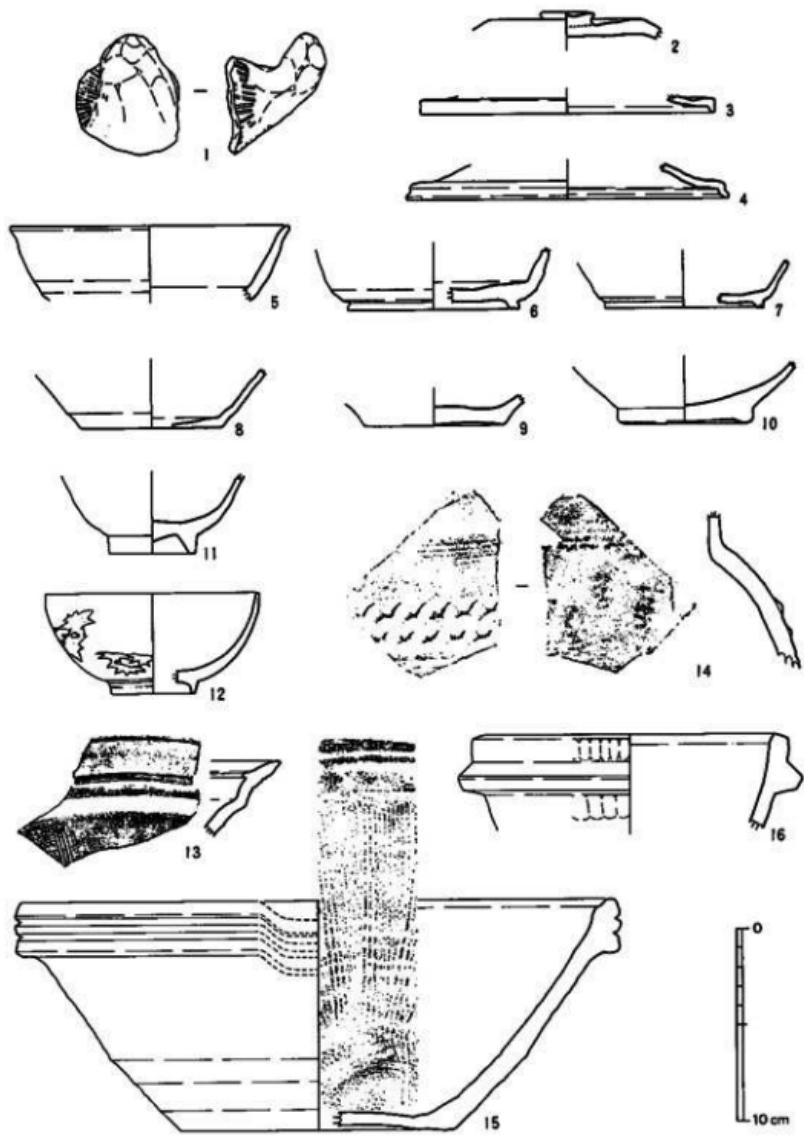
壺身 (5)は胴部のみであり、口縁はわずかに外反し、端部は丸くおわる。内外面共にヨコナデ調整である。口径は14.6cm、色調は灰色、胎土は堅緻、焼成は良好である。(6-7)はやや斜め外方に開く高台を有するものである。内外面共にヨコナデ調整である。高台径は(6)が9.0cm、(7)が8.3cmである。共に色調は灰色、胎土は堅緻、焼成は良好である。底径は7.4cm、色調は灰白色、胎土は堅緻、焼成は良好である。

### 土師質土器

皿(9) 底部はやや上底であり糸切りである。内外面共にロクロナデである。底径は7.3cm、色調は淡褐色、胎土は細砂を含み、焼成はあまい。

### 陶磁器

青磁壺 (10)は低い削り出しの高台がつくものである。素地は白灰色であり、内面と外面の高台上部まで緑灰色の釉がかけられている。高台径は7.1cmである。胎土は堅緻、



第10図 土器及び石製品実測図(1 : 3)

焼成は良好である。(11) は高い削り出しの高台がつくもので高台径は 4.5cm である。素地は白灰色であるが高台部は赤色をおびた茶褐色であり、内面・外面・高台まで緑灰色の釉がかけられている。胎土は堅緻、焼成は良好である。

伊万里焼壺(12) 脊部はゆるやかに湾曲し高台をもつ。青色で胴、高台部に文様・条線を施している。口径は 11cm、高台径は 4.4cm、高さは 5.3cm で、素地は白色、胎土は堅緻、焼成は良好である。

ナリ鉢(13) 大形の器形と推定される。内面に凸帯をもち 4 本のカキ目がみられる。色調は口縁内外面共暗い赤色、胴内面は暗灰色、胎土は堅緻、焼成は良好である。

壺(14) 南方産と考えられる。胴外面に押圧の刻みのある低い凸帯を 2 段もつ。内面には叩き痕がみられる。色調は外面は暗灰色、内面は赤茶褐色、胎土は堅緻、焼成は良好である。

備前焼すり鉢(15) 口縁は幅広く 2 条の沈線をもつ。外面はロクロナデである。内面は上から下に 10 本単位のカキ目を施し、底部内面はヨコ一方向にカキ目を施している。口径は 31.2cm、高さは 11.9cm である。色調は暗赤茶色、胎土は堅緻、焼成は良好である。片口をもつ可能性がある。

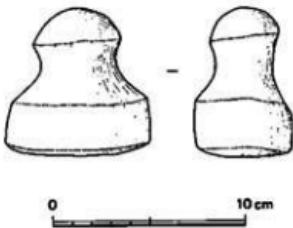
## 2. 石製品類

石鍋(第10図16) 滑石製である。口縁部外面に断面台形の鋸を有し、体部はやや内湾する。外面はノミ状工具で丁寧に削り、内面は磨滅している。口径は推定 17.6cm である。鋸の下までススが付着している。

スタンプ形石製品(第11図) 頭部は半球状にふくれ、基底部の平面形は長楕円形を呈し、底面はわずかに弧状にそっている。凸字形をしている。頭部は長径 4.8cm、短径 3.8cm、くびれ部は長径 4.2cm、短径 3.3cm、基底部は長径 7.6cm、短径 5.1cm、全高 7.6cm である。外面はガラス化している。石質は閃綠岩と考えられる。重さ 385g である。

## 3. 鉄製品類

鉄釘 断面方形の角釘が出土している。



第11図 スタンプ形石製品実測図(1:3)

## V まとめ

本年度の調査は昨年度の調査と異なり、当初より御藍配置・寺域の確認を目的として行った。その結果、新たに建物基壇Ⅰ、寺に関係するか、又はほぼ同時期と考えられる柱穴群、及び中・近世と考えられる柱穴群・土壙群を検出した。しかし、寺域を確定することはできなかった。以下調査の結果について簡単にまとめ、今後の問題を明らかにし、まとめとしたい。

新たに検出した建物基壇Ⅱは南西コーナーのみを検出したにとどまった。しかし、基壇の方向は建物基壇Ⅰと同方向であり、出土する瓦等から建物基壇Ⅰ・Ⅱは同時期であり、御藍を形成していたものと考えられる。基壇Ⅱは基底部だけであるが、地山の削り出しにより築成されており、外装は認められなかった。しかし、基壇Ⅰは内側を博・瓦、外側を石列により外装されていたことを考へるなら、基壇Ⅱが直ちに外装されていなかつたと断定することはできず今後の調査を待つて結論を下したい。また、建物基壇Ⅰの東西規模も削平により明らかにすることはできず、またその東側でも造構を検出することはできなかつた。以上、御藍中枢部と考えられる平坦地内で建物基壇を2基確認したことになる。しかし、一方に向ふのではなくずれて位置している。以上のことからこの2つの建物基壇の性格を今回の調査結果から言及することは難かしいが、これまで県内で調査された例をもとに比較検討してみたい。塔についてみると推定されているものをも含み一辺の規模は、全国的にも大きな伝吉田寺の14.5m<sup>(1)</sup>を最大にして小山池廃寺が13.2m<sup>(2)</sup>、宮の前廃寺12.6m<sup>(3)</sup>、中谷廃寺11.5m<sup>(4)</sup>、寺町廃寺11.2m<sup>(5)</sup>である。金堂についてみると小山池廃寺?×15.6m、宮の前廃寺25.3×15.5m、寺町廃寺16.0×14.0(?)mである。また御藍配置では伝吉田寺・宮の前廃寺・寺町廃寺が法起寺式と考えられ、中谷廃寺は法隆寺式の可能性があると考えられてゐる。以上の例、及び地理的にも創建年代からも非常に関係が深いと推定される寺町廃寺例を考え合わせてみると、建物基壇Ⅰは金堂跡、建物基壇Ⅱは講堂跡の可能性が強いといえよう。いずれにせよ今後の調査を待つて結論を出したい。

また建物基壇Ⅰの南西方向では大形の掘り方の柱穴群を検出した。全体の規模は不明であるが、柱穴の大きさから本寺と関係深いもの、あるいは同じ頃のものと考えられる。寺に関係するものであれば掘立柱の建物=僧房の可能性がある。今後寺に付随

する建物の存在も考慮して調査する必要がある。

軒丸瓦は昨年度と同様、複弁八葉蓮華文軒丸瓦一種類のみであり、寺町廃寺 F1a式、寺戸廃寺 F式に比定できる。<sup>(16)</sup>今回の調査では完形、及びそれに近いものは少なく、また時間的制約もあり範型について詳細な検討はできなかったが、寺戸廃寺出土のものに比べて中房が小さい。<sup>(17)</sup>水切り部には二形態見られ、三角形が内反りのものと外反りで広い面積を有するものとがあり、後者は1点のみ出土している。水切り部は形態差から5分類され、その変化にある程度の時期差も認められている。しかし、素弁の軒丸瓦に伴うと考えられている外反りのものが本廃寺では出土しており、二形態が混存して存在する可能性が明かとなった。今後資料の増加を待ってその形態変化、機能を検討したい。

平瓦については側面は叩きと刷毛目調整から三分類でき、凹面は布目に粗・密の二種類がみられる。全て桶巻づくりであり、幅3~4cmの模骨痕が認められ、完形品で8枚、それからすると桶は32枚の板でつくられていたのであろう。側面には分割裁線が全て認められ、凸面全体に切り残し痕を残すタイプのものがほとんどであるが1点のみ側面端部にのみ切り残し痕が見られる。<sup>(18)</sup>

以上今後軒丸瓦については範型・水切り部、平瓦については叩きのみならず製作法を検討することにより他の寺跡との関係、工人集団の動き、規模を明らかにできるであろう。本廃寺と関係が深いと考えられる寺町廃寺出土のS I式と柏寺廃寺出土の1類bの軒丸瓦とが同範の可能性がきわめて強いという事実が明らかになっている現在、各々の寺の瓦類の検討がより必要であろう。そのことは単に工人集団の動きにとどまらず、支持母胎である在地豪族間の関係・交流の問題をも含んでいるといえよう。

また特異な遺物として隅木蓋瓦と有孔の円形瓦が出土している。隅木蓋瓦は凸帯を有し、箱状を呈さず、釘穴も無く他例と異なる部分もあるが、板状であり三角形の切り込みがありその可能性は大である。隅木蓋瓦は県内では初見であり、全国的に見ても数カ所でしか出土しておらず貴重な資料である。有孔円形の瓦は用途不明であるが垂木先瓦と同大であるが装飾性に欠けており、留具の一部として使用したのであろうか。

今次調査により本廃寺が単に一堂塔的なものではなく比較的整備されていた可能性が出て来た。したがって寺町廃寺とは独立した存在として考えうるといえよう。このことから備後北部は一郡一寺的存在ではなく未発見の寺跡があるのではなかろうか。

つまり備後南部等他地域の寺の群立状態は、律令体制の完備の中で在地豪族が自らの経済的基盤維持のため土地・奴婢の所有が認められている寺にその代替えを目的として造寺し、從来の力を維持する方法を見いだしたとするならば上記のことは首肯されるであろう。しかし、それは指摘されているようにその必要性が失せた時、つまり天平15年(743)の墾田永代私有令によって終止するが、以後寺自体に変化が生じていなければならない。本廃寺の場合、軒丸瓦一種類のみで短期間の存続であり上記のことを首肯するかに見えるが、他の廃寺の調査結果を待って比較検討する必要がある。また後期古墳の流れの中で支持母胎である在地豪族の問題、それと寺町廃寺との関係を把えていく必要があろう。

なお、本廃寺の所在する丘陵上には中・近世の柱穴・土塙群、遺物も見られ丘陵全体が長期間にわたる遺跡である可能性が出てきた。今後、この期の遺構についても注意していく心要があろう。

#### 註

- (1) 広島県教育委員会『伝吉田寺跡発掘調査概報』 1968年
- (2) 広島県教育委員会『小山池廃寺発掘調査概報』 第1・2・3次 1977・1979年
- (3) 福山市教育委員会『史跡宮の前廃寺跡』 1977年
- (4) 1978年特選町教育委員会調査
- (5) 1979年三次市教育委員会調査
- (6) 松下正司「備後北部の古瓦」『考古学雑誌』第55巻1号 1969年
- (7) 趣(6)と同
- (8) 趣(6)と同
- (9) 佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第18巻2号 1972年によると3分類されている。
- (10) 岡山県教育委員会「柏寺廃寺緊急発掘調査報告書」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」34 1979年
- (11) これまで出土している寺跡は、奈良県薬師寺・平城宮跡、大阪府新堂廃寺跡、京都府西隆寺跡、兵庫県但馬国分寺跡、和歌山県上野廃寺跡であり、軒平瓦軒用品もある。
- (12) 間壁貢子「官寺と氏寺」『古代の日本』4(角川書店) 1970年

#### (追記)

本廃寺建物基壇Iの外縁で平瓦を立てて貼り付けていた。これと同じものは横見廃寺で見られ、類似のものとして柏寺廃寺が考えられる。また軒丸瓦についても寺町廃寺と柏寺廃寺の間に関連性がみられ、また上山手廃寺とも間接的にではあるが関係していると考えられる。瓦を立てる基壇自体について一つの系統が抱えられるのではないか。このことから達寺に関係する集団の動き、在地豪族間の関係も明らかになるのではなかろうか。

図 版



a 上山手廐寺跡全景(東より)



b 同上 (南より)



a 建物基壇 II周辺瓦群堆積状態(東より)



b 建物基壇 II(東より)



a 建物基壇 II(北東より)



b 1 トレンチ柱穴群(北西より)



a 1 トレンチ 鶴尾出土状態



b 同 上 有孔円形の瓦出土状態



a 4 トレンチ柱穴群(南より)



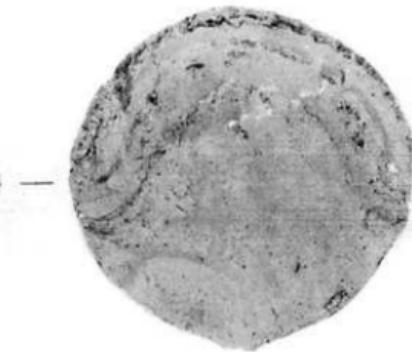
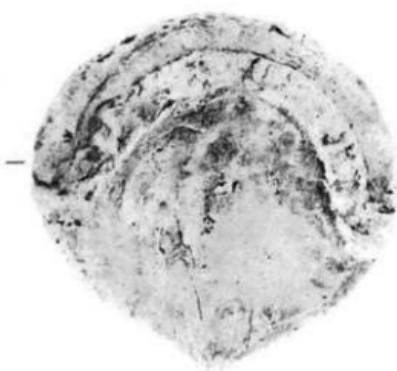
b 5 トレンチ瓦・礫群出土状態(西より)



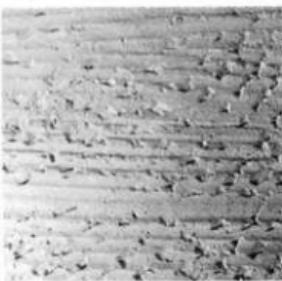
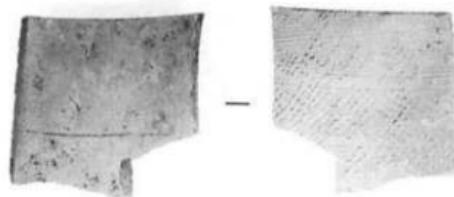
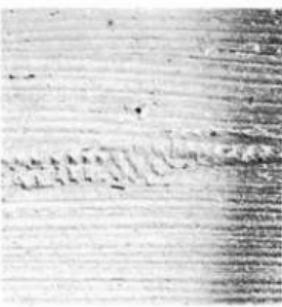
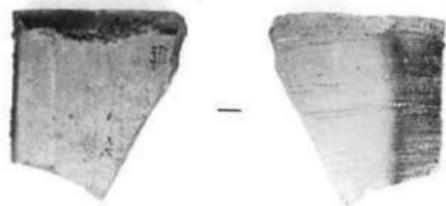
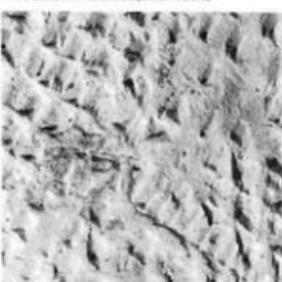
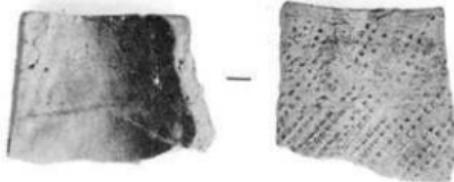
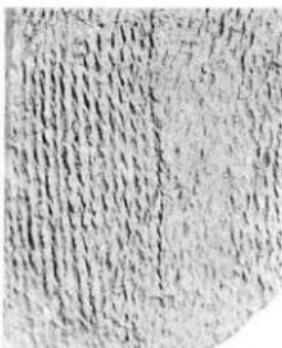
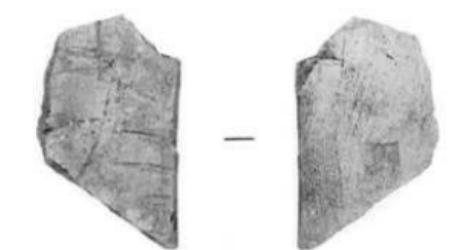
a 6 トレンチ柱穴群(南より)



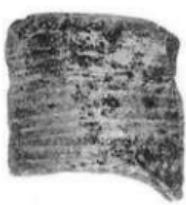
b 7 トレンチ溝状遺構・柱穴(北より)



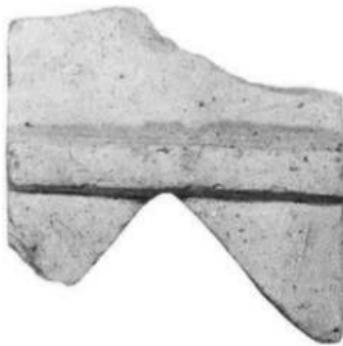
軒丸瓦



平 瓦



—



—



平瓦・丸瓦・隅木蓋瓦



有孔円形瓦・鶴尾・土器・スタンプ形石製品・鉄釘

1980年（昭和55年）3月

上山手廐寺発掘調査概報（2）

編集発行 広島県教育委員会

印 刷 至誠堂印刷株式会社